

A. Hirakawa, ed.:

# INDEX TO THE ABHIDHARMA.

## KOŚABHĀŚYA

### Part One: Sanskrit-Tibetan-Chinese

渡 辺 顯 信

#### I

世親の阿毘達磨俱舍論が、佛教研究の基礎学における重要な論書として取扱われてきたことは、周知の通りである。しかし従来テキストは、俱舍論本文・偈頌・註釈書に対する漢訳及びチベット訳が主であった。サンヌクリット原典に関しては、

俱舍論本頌すなわち V. V. Gokhale ed.: *Abhidharmakośa-Kārikā of Vasubandhu*, (1946) と称友の俱舍論疏すなわち U. Wogihara ed.: *Sphuṭārtha Abhidharmakośa-yaśkyā* by Yaśomitra, (1932-6) のみで、決して充分ではなかった。

幸にして一九三五年にサンヌクリット本文の写本が *Rahula Saṅkriyāyana* によってテキストの僧院で発見され、それに基いて梵文原典が七年前本トナから出版された。すなわち

Prof. P. Pradhan ed.: *Abhidharmakośa-bhāṣya of Vasubandhu*,—Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII  
—K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.

であり、この出版によって、俱舍論の基本的テキストは一応揃ったことになる。

ところで、文献学的研究をすすめる場合、原典の批判的研究やその出版に次いで期待されるものは、原典に対する優秀な索引やコンコードダンス等である。

俱舍論に関する索引としてわれわれはすでに、舟橋水哉編・舟橋一哉増補「冠導阿毘達磨俱舍論索引」(一九五〇)の恩恵に浴しているが、ここに紹介する索引は、前述せるプラダン編の梵文俱舍論本文に対する索引であり、久しく期待されていたものである。これは、平川彰教授及びその若き協力者数人の手になる労作であり、実にこの刊行によって梵文俱舍論の文献学的研究は、新たな一歩をふみ出したと云っても過言ではない。

#### II

本書のはしがきによると、著者はプラダン本の出版により可能となった梵・藏・漢訳を網羅した俱舍論の索引作成を企画し、本書をその「第一部サンヌクリット語・チベット語・漢訳対照」として公刊し、第二部を漢訳語基準の索引として続いて出版するといふ。

さて、本書の構成は次の通りである。

#### CONTENTS

[A] Preface .....	1
[B] Guide to the use of the Index .....	iii
[C] Introduction .....	1

[D] Index to the Abhidharmakośabhāṣya ..... 1

[E] Sūtra-, Śāstra-, Ācārya-, etc. ....422

[F] Corrigenda of the Text edited by Professor

P. Pradhan .....425

註(1) 順序を示す[A]~[F]は、紹介・書評の便宜上、筆者が付したものである。

(2) ナキトノ頁の p. 422 及び p. 425 は、夫々 p. 423, 427 に訂正。

(3) [C] Introduction のローマ数字 274 の頁付 XXXX~XXXX XIV は一般に XL~XLIV とすべきである。

[A] Preface [B] Guide to the use of the Index

はしがきにおおては本書刊行の経過が述べられ、索引の凡例については利用者の便宜を考慮した懇切な解説が述べられている。以下節を追って紹介しよう。

[C] Introduction

I. The Author of the Abhidharmakośa.

II. The Date of Yasubandhu—The Discussions on Two Yasubandhu.

III. The Relation between the Abhidharmakośa and the Viñāpinatratā.

IV. The Relation between the Sautrāntika and the Mahāyāna Buddhism.

V. The Reference used for the Abhidharmakośa.

VI. The Structure of the Abhidharmakośa.

序論として著者は、学界の現状をふまえてついで四四頁もの紙面を費して、世親及び俱舍論に関する英文解説を施している。

I 俱舍論の作者

ここでは、現存するチベット訳及び漢訳俱舍論と、称友造梵文俱舍論疏及び他の漢訳文献にもとづいて、俱舍論の作者が世親であることを再確認しよう。

[テキスト p. I. の脚注訂正。4. Sphuṭārtha—Sphuṭārtha.: 5. Tātsho No. 2089—T. No. 2087.; 6. Tātsho No. 2949—T. No. 2049]

II 世親の年代——世親二人説について——

世親二人説に関する諸説の中から、特に E. Frauwallner の説をとりあげて反論を加え、著者の立場を示してやる。即ちラウワルナーは弥勒・無著・世親の年代を示す中で、瑜伽行派に属し無著の弟である世親と、俱舍論の作者としての世親は別人であることを主張する。

(Yasubandhu der Älter um 320-380 n.u.z.: Yasubandhu der Jünger um 400-480 n.u.z.)

その論拠は、1 口伝による世親生年説、2 世親の著作と推定される鳩摩羅什訳の三著作の存在、3 世親著の金剛般若経論に対する註釈書「金剛仙論」の存在、以上の三点にあると云う。

これに対して著者は、その内容を夫々詳述しながら反論し、世親の年代を西暦四〇〇—四八〇とする干渴龍祥説を支持している。結論として著者は、瑜伽行派に属していた世親の他の著作と俱舍論との間に認められる類似性から、ラウワルナー説の二人の世親は実は同一人物であることを論証する。然し世親複数説を否定するのではない。即ち、称友の俱舍論疏、法救の

雜阿毘曇心論、普光の俱舍論記等の記録により、俱舍論の世親とは別人の世親が存在していたことを容認している。なお、瑜伽行派の世親と俱舍論の世親を同一人物とする論拠について次節で更に論述する。

### Ⅲ 俱舍論と諸唯識論との関係

まず世親に帰せられる諸著作を、Buston, Taranātha の著作および山口益著「世親の成業論」から詳細に引用して、俱舍論と無著の弟である世親の主要著作・唯識三十頌等との類似性を指摘する。そして俱舍論の世親が唯識三十頌等の作者でもあることを証明し、更に瑜伽行派に属していたことを論証しようとする。即ち、著者は陳那と安慧の俱舍論註釈書がネット訳中に現存することを述べた後で、次のように云う。

“... and also it is pointed out at the beginning of the *Yākyā* by Yaśomitra that the Kośa had the commentaries by Guṇamati and Vasumitra.”  
と云ふ、続云ふ

“The facts that they belonged to the Yogācāra School suggest that the Kośa was studied in the Yogācāra School, which means the doctrine of the Kośa is similar to the doctrines of *Vijñānavāda*.”

と云ふ。

いま便宜上引用文を二つに分けたが、前半について一言するべし、この部分の原文は

“*Guṇamati-Vasumitrādyaiv yākyākarāni...*” (Kośa-

*yākyā* p. 1, 11)

であるから、当然“*and*”の語をも翻訳すべきであろう。

次に後半について云えば、“*which means...*”以下の論述が不充分である。即ち、俱舍論が瑜伽行派の中で研究されていたという事実は肯首できるが、なぜ直ちに俱舍論の教理と唯識論の教理とが類似していたことを意味する”と云い得るのであるか。それについての論証がないかぎり“*which means...*”以下の論述は説得力が薄弱である。

このあと著者は、世親が有部から經量部へ、さらに唯識論へと転入していった論証として、俱舍論、大乘五蘊論、成業論、唯識三十頌等の相互関係を論述する。

まず初めに、俱舍論で体系づけられた五位七十五法と大乘五蘊論の五位七十九法が多く一致することを明らかにする。次に瑜伽行派の教理を継承する大乘五蘊論は、その無為法の分類によって俱舍論と瑜伽師地論との間に位置づけられ得ると述べる。

次に瑜伽師地論の法の体系である百法については、大乘百法明門論を引用してその特徴を、1 五位の順序、即ち心・心所・色・心不相応行・無為にあるとし、2 五位夫々の分類にあるとする。この百法は瑜伽師地論の本地分とか、大乘阿毘達磨集論の本事分から集められたものであるとするが、その分類において瑜伽行派の諸著作の内容とは一致しない。しかし瑜伽行派の伝統を継承したことは明白である。そして阿頼耶識と心所法の内容が大乘五蘊論と一致することから、俱舍論と大乘五蘊論、

百法明門論との間に密接な関連性のあることを指摘して、これ等諸論書の作者は同一人物であると推測している。

最後に、世親の著作として有名な成業論はその阿頼耶識の説明を除いては俱舍論と近似している。ところで成業論が阿頼耶識について引用する諸經典の中に、解深密経があるがこれは大乘經典からの唯一の引用であって、それ以外はすべて阿含經典から引用している。そしてその批判対象は、有部や正量部・大乘部・譬喩部・銅鑠部その他の部派佛教である。この事実により著者は、成業論が経量部の立場をとり、部派佛教に属する著作であって、俱舍論と唯識論との間に位置する著作であるという。そしてその作者が俱舍論の作者と同一人物であろうとみるのである。

以上の論述を総括的にまとめると次のようになる。世親は有部から経量へ転入する過程において俱舍論を著作し、経量部から大乘瑜伽・唯識に転入する直前に成業論を著作し以後、大乘五蘊論、百法明門論へと続き、多数の論書を著作したと思われる。

〔本索引X頁26行目、The Commentary on the Saṃnukhīdharanī (Tohoku 3988...)の東北ナンバーは、異本。正しくはNo. 3989又はNo. 2694(大正二六一)か。北京No. 5489, 3518〕

#### IV 経量部と大乘佛教の関係

世親が経量部に近い立場にありつつも、有部の伝統の下で俱舍論を著述したという事実は、経量部の教学体系が有部のそれほど整備されていなかったことを意味している。著者は次の事

例を以ってこの事情を解説する。馬鳴、龍樹、聖提婆と同時代の人物に、鳩摩羅多 Kumāratā が居た。彼は経量部の創始者とされるが、その代表的な著作「喩鬘論 *Dṛṣṭāntaparikā*」の名に因んで、譬喩師 (*Daśāntika*) と呼ばれている。

ところで、大毘婆沙論において譬喩師の教理が八十七種も引用されているのに対して、経量部の名前も二箇所しか引用されていない。この事例は、大毘婆沙論が書かれた時点には経量部はまだ十分に整備されていなかったことを示している。経量部の特徴は、他の学派を批評することにより経量部自身の立場を説明していると云える。

以上の論述に加えて著者は、経量部師を自認する称友の事例を提示して経量部と大乘佛教との間に密接な関係があったことを論述するのである。

#### V 俱舍論作成に用いられた参考文献

まず初めに、俱舍論作成の由来として、真諦訳「婆藪槃豆法師伝」の記述および、円暉「俱舍論頌疏」の記述等を引用し、カシュミールが毘婆沙の本拠地であったことを示す。そして大毘婆沙論に関する研究成果として、次のような諸訳訳・諸註釈を列挙する。

雑阿毘曇毘婆沙・尊婆須蜜菩薩所集論・阿毘曇八鍵度論・阿毘曇心十六卷本及び同四卷本・鞞婆沙阿毘曇・阿毘曇毘婆沙・雑阿毘曇心論

次に、有部の伝統的論書は、発智論を身論とし品類足論等の六論を足論とする所謂「六足発智」によって構成されているが、

その流れは、法蘊足論・集異門足論から施設論に続き、識身足論・界身足論へと発展し、紀元前一世紀頃に著作された品類足論・発智論によってその教学が整理された。その集大成は、発智論に対する註釈書「大毘婆沙論」の完成によって為し遂げられた。

十万偈頌より成る大毘婆沙論に対する註釈書は、前述のように数点存在するが、その随一は俱舍論である。この俱舍論作成に関して直接の参考文献となったものは、雑阿毘曇心論である。このことについては、俱舍論と雑阿毘曇心論の構成内容・偈頌数等に関する夫々の研究によって、明白である。

以上の結論として著者は、大毘婆沙論から俱舍論への伝播形態を次のように記述する。

大毘婆沙論↓阿毘曇心論↓阿毘曇心論経↓雑阿毘曇心論↓俱舍論。

〔序論 p. XXVII, 38 行の Skandhita (悟入) は、著者の指示 (大正一八二三、一八四頁 a 二四—二六) に従うかぎり悟入 (Skandhita) とすべきであろう〕

#### VI 俱舍論の構成

本節において著者は、俱舍論の構成及びその内容を各品毎に詳述しているが、紙面の都合で紹介を省略する。なおこの部分は、多少の加筆によっては初学者用の入門書ともなり得べき抄録になっている。

ところで、V) 睡眠品の解説において、Kleśa を anuśaya と pariyavasthāna で説明する俱舍論本文の引用頁が、p. 298,

19 となっているが、“p. 278, 19”である。次に VI) 賢聖品の四向四果中、一來・不還につづいての表記が二様に示されている。即ち

序論 p. XXXIX 序論 p. XXXXI (→p. XL1)

一來向 sakridāgāmipratipannaka—sakridāgāmin

一來果 sakridāgāmin sakridāgāmiṣhala

不還向 anāgāmipratipannaka anāgāmin

不還果 anāgāmin anāgāmiṣhala

この混同は、索引中にも散見されるので検討を要する。

また VII) 定品の解説末尾において、第三九偈及び第四〇偈を引用して結論が叙述されているが、結論の文脈からみてこの二偈は、続けずに明確に区切られるべきであろう。

〔C〕序論全般にわたり、初歩的な校正ミスが目立つ。出版を急いだためであろうか〕

〔D〕Index to the Abhidharmakośābhāṣya

さて、本書の中心たるこの章は、四二〇頁余にわたる膨大なものである。本来ならば索引という性格上、十分に活用した後検討を加えるのがたてまえであるが、いまはその余裕がないので、本索引の特徴を紹介することを以って筆者の責務の一端にかえたい。

さて、たとえ小規模な索引であろうとも、その作成作業は本来地味であり、苦勞も非常に多い。ところが本索引は、項目の単なる該当頁の記録にとどまらず、見出し項目に相応するチャット訳、及び漢訳の真諦訳・支婁訳をも収録している。加えて、

見出し項目中、本文中に説明のある場合には、その頁数をゴシック活字によって区別している。

このような特徴を持つ本書は、単なる索引の領域を越えたものであって、まさしく Glossary 及び Concordance を兼ねた「俱舍論語彙用語小辞典」とも云うべき索引である。摘録項目の選定基準等については、何ら示されていないが、その内容は、八ポイント活字を中心として各頁四五行、総計一九一〇〇行に及ぶ。項目数は、主項目だけでも六五〇〇余の多数にのぼっている。因みに代表的な主項目を、機械的にその摘録数量順に配列してみると次のようになる。

kāma, sarva, sva, rūpa, dharmā, dukkha, citta, pūrya, kuśāla, kāya, karma, etc.

全く偶然であるが、この十項目余をみると俱舍論の教理の輪郭が髣髴として来る。索引の索引たる所以であろう。

[E] Sūtra, Śāstra, Ācārya, etc.

本書は索引の部の後に、経、論、師等に関する必要事項を一六項目あげて、利用の便を図っている。

[F] Corrigenda of the Text edited by Professor P. Pradhan

すでにプラダン自身の手になる二〇〇余の正誤表が、その本文の巻頭に掲載されているが、ここでは更に五〇〇余の正誤をあげる。プラダン本の典拠は、一九三五年ラーフラ・サーンクリティヤーヤナによってチベットの僧院で発見された写本であることは前にもふれた。その発見から出版に到るまでに、すでに三二年の歳月を経ている。この間に生じたであろう諸般の事情を考慮するならば、ここに示された正誤数は、ある程度やむを得ぬことであるかもしれない。

### III

以上、本書の内容をその構成順に紹介しつつ卑見を試みてきた。はじめにも述べたが、文献学的研究における索引の果たす役割は、きわめて多大である。換言すれば、索引の優劣は、その文献の死活を左右するキーポイントであると云い得る。かくして、俱舍論研究、ひいては佛教研究における本索引出版の意義はきわめて深く、学界への貢献も非常に多大である。予定されている第Ⅱ部索引等の早期刊行が期待される。

(B 5版 四九六頁 七、五〇〇円 一九七三年三月三〇日 大蔵出版社)